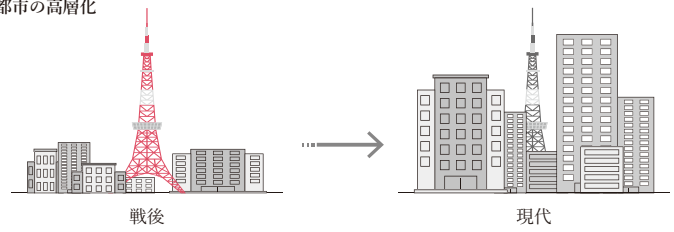


背景

都市の高層化



一般的にランドマークとは土地の目印となる事物・景観をいう。自然物・建造物を問わないが、目立つこと、特徴があること、伝統的であることなどが要件とされ、ときには、地域の象徴（シンボル）となることもある。本来ランドマークとは上記のような条件を満たせば形や大きさなどに制限はないが、多くの人々はランドマークとはタワー型建築や高層建築であると認識している。しかし、現代日本の都市空間にはタワー型建築や高層ビル群が多数存在しており、ランドマークの機能が相対的に低下しその役割を十分に果たしていないように思える。それでもなおランドマークは都市を認識するうえで重要な役割を担っており、多くの都市にとって必要不可欠なものである。このことから、これまでの「ランドマーク＝高層建築」という概念を飛び越え、人々のランドマークの認識を拡張していく必要があると考える。

非高層巨大建築



一方、現代日本の都市空間には都市開発に伴い、多くの巨大建築が誕生している。この巨大建築の中には高層ビルのような垂直方向へ伸びていくものだけでなく、駅ビルやスタジアムなどの水平方向へ延びていく「非高層巨大建造物」が多く存在する。これら非高層巨大建造物には多くの路地が突き当たっており、都市空間の様々な場所から観測されるという点においてタワー型の巨大建築と同じ性質を持っており、ランドマークとしてとらえることもできるだろう。本論では駅ビルやスタジアム、美術館などの非高層巨大建造物に焦点をあて、それらのランドマークとしての特徴を探り新たなランドマークの在り方を考察する。

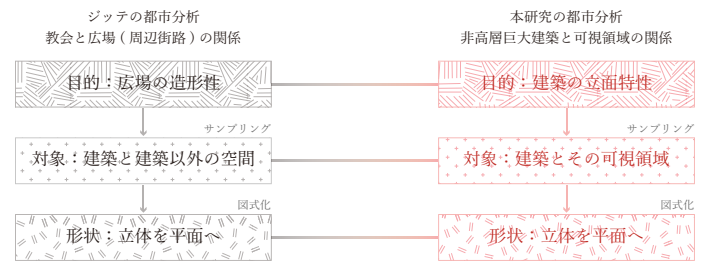
都市分析

建築家の都市分析



平面と立面の関係から都市空間を形成するスケールや形ロジックについてみて分析する。カミロ・ジツテ『広場の造形』では美しく活力ある都市空間の広場の大きさと形について、いくつかの仮説を提示している。主眼に対する広場の大きさと形についてだ。ジツテはそれらの仮説の中で、教会と広場の関係性を表すものとしてレイアウト図を作成し、建築と建築以外の空間の形を平面上でとらえ分析した。これと同様に、非高層巨大建築の立面を考察するにあたって都市を一旦平面上でとらえることとした。今回抽出する平面情報としては建築以外の空間のなかでもランドマークにおいて最も重要な要素の一つである視認性を明らかにするために建物の可視領域を抽出する。

研究方法と抽出手順



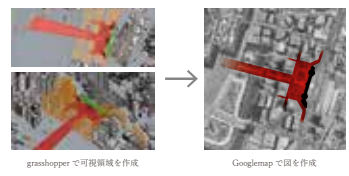
水平のランドマーク

—非高層巨大建造物における立面特性の研究—

黒田 尚幹

抽出

可視領域図の作成



- 非高層巨大建築の可視領域を Google map と grasshopper を用いて作成する。高、可視領域は「観察者が対象建築の立面を視認できる領域」と定義する。
- ① 対象建築の水平投影面を作成
 - ② 水平投影面の各角に点を配置
 - ③ 各点から放射状に線を飛ばす（線同士の放射角度は1度とした。）
 - ④ 線が障害物（周辺建築物）にぶつかった地点に点「」を配置。
 - ⑤ 全ての点同士を結び、可視領域面を作成。

※地形は平坦なものとし、インフラ（高速道路、線路等）も障害物に含む。

類型化

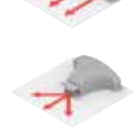
広場型

可視領域図が面的要素を含む場合。一定の距離をもって駅ビルを眺めることが可能なため、観察者は駅ビルの全体像がとらえやすい。



枝分かれ型

立面に対して複数の本街路が突きあたり、その先が立面全体に分散している。つきあたり先は観察者によって局所的かつ集中的にみられる。



放射型

立面に対して複数の本街路が突きあたり、その先が一点に集結している。つきあたり部分は集中的に、様々な角度から観察される。



大通り型

枝分かれ型・放射型のいずれかに分類されたもののうち、一本の街路が他と比べて明らかに長いもの。大通りの先に観察者の視線が集中する。



並行型

平行要素で構成されている。立面と平行する方向に延びる街路から観察され、空間の奥行知覚を助ける。



立面特性

均質性 homogeneity

単一材料で構成されている。あるいは一定のデザインのリズムで構成されているもの。全ての通りから同一のデザインに見える。観察者は駅ビルの全体像が見えやすい。



特異性 specificity

立面全体が複数のデザインコードで構成されている。あるデザイン構成のなかに、局所的に他とは異なる要素が付加されているもの。ファサードが分散的なデザイン構成を持つため、建築につきあたる通りから観察される立面部位の特徴はすべて異なり、均質性の場合のように景観を統一するのは逆に個性を与える要素となっている。



独立性 independence

建築全体が独立した単体のデザインであるもの。周辺建築からデザインの影響を受けたいためアイコンとして認識しやすく、シンボリックな印象を与える。正面が明確になるため、観察者と建築の位置関係（方向）を把握しやすい。



分類・分析

分布図

作成した五つの可視領域類型と三つの立面特性をもとにサンプルをプロットし、分析を行う。いそれぞれの傾向や組み合わせによる特徴を明らかにしていく。

	広場型	枝分かれ型	放射型	大通り型	並行型
均質性 homogeneity					
特異性 specificity					
独立性 independence					

結び

考察



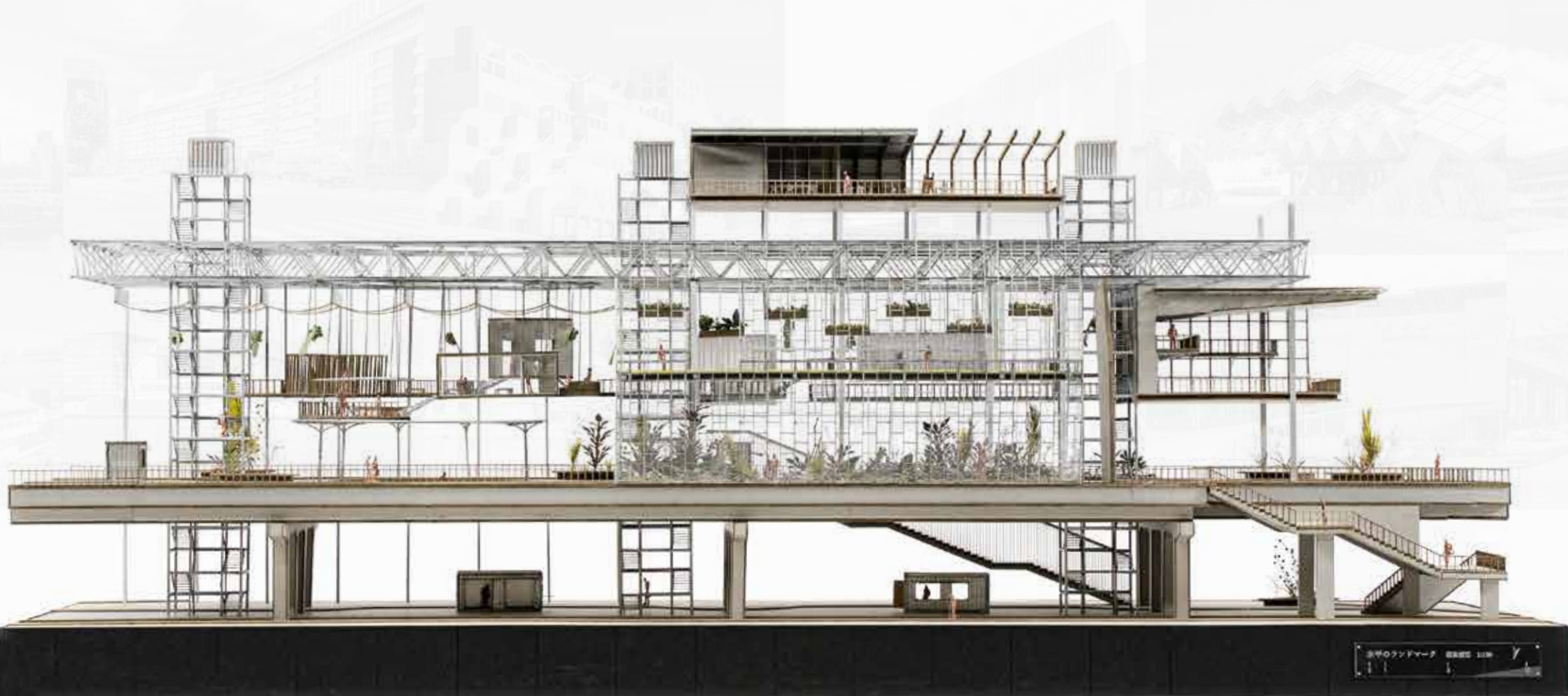
これまでランドマークの研究の多くではタワー型の建築について考察されてきた。そしてそれらは都市の中で点として認識されてきた。本研究では、点として認識されない水平方向に巨大な非高層建築の周辺の都市構造と、建築そのものの立面特性が組み合わさることによって、都市に対して様々な見え方を呈していることを示した。とりわけ「枝分かれ型」という類型は、水平方向に巨大な建築だからこそ生じている特徴だとと言える。池袋駅は多くの街路が突きあっているという都市構造に対して、均質な立面で答えることによって、人々に同一の建築を見ているという認識を想起させ、都市の認知を促している。一方で京都駅は、立面が分散的なデザインをしているために、それぞれの街路からみえる立面部位には統一性がないにも関わらず、同一の建築をみているという認識が想起されており、その結果都市の認知が促されている。独立性の立面である向川武蔵野ミュージアムはアイコンとしての機能を有しており、従来の高層型のランドマークの性質に近い特性がある。

一般的に建築的な議論の対象としてはあまり語られてこなかった非高層巨大建築であるが、本研究を通じて、非高層巨大建築のファサードがその周辺の都市構造に呼び応じ、絶妙に組み合わせながら人々の都市の認知を促していることがわかった。非高層巨大建築は今後日本の都市においてますます増え得ることが予想される。都市空間において、水平のランドマークとしての機能を十分に発揮する立面デザインを追求していくことの重要性を改めて指摘し、本研究の結びとする。

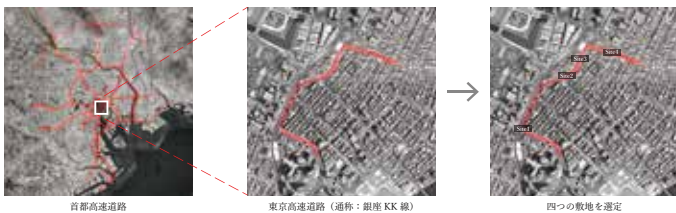
展望



本研究で語られた非高層巨大建築であるが、日本の都市空間には同様のスケールをもったものが多く存在する。その一つが高速道路である。首都圏をめぐる首都高速道路は建築同様のスケールで街のあらゆる場所を観測することができる。つまり、高速道路は建築同様に立面を有するものとして考えるならば、これらも十分に水平のランドマークとしてデザインし得るものである。本研究では非高層巨大建築の立面特性を明らかにしたが、これを橋やダム、道路などの土木で応用すれば、新たな都市空間のデザインを提示することができるだろう。そしてそれは単体で完結するものではなく、都市の様々な部分と密接し、街とともに成長し、時に異変しながら絶えず変化していくものである。



敷地



首都高速道路

東京高速道路 (通称: 銀座 KK 線)

四つの敷地を選定

START!
首都高速道路日本橋区間地下化事業

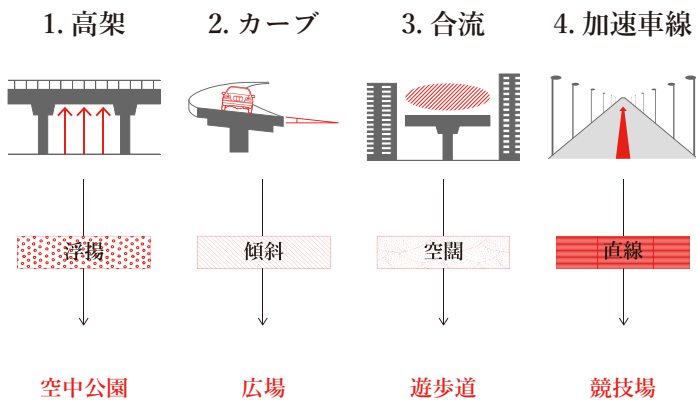
敷地は首都高の銀座を囲むように走る東京高速道路、通称銀座 KK 線。この道路は現在、「首都高速道路 日本橋区間地下化事業 (START!)」による首都高速都心環状線 (C1) のルート変更にもない廃道となっており、形骸化が懸念されている。また、屈強な構造であるために解体も容易ではなく、今後も撤去される予定はない。

敷地は首都高の地下化事業により廃道となった東京高速道路、通称銀座 KK 線。



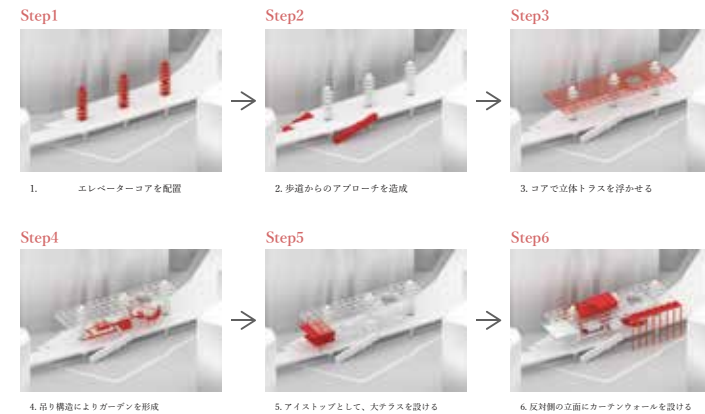
提案：機能を失い形骸化した首都高 (KK 線) を都市を巡るプロムナードへ変貌させる。

ダイアグラム



選定した四つの敷地から形態的特徴を洗い出し、それぞれから「浮揚」「傾斜」「空間」「直線」の四つのキーワードを抽出した。このキーワードから即物的に設計を行い、敷地の潜在性を引き出す。また、敷地 1 の高架ではこれらの拠点となるハンギングガーデンを設計する。

計画



GL からたて動線としてエレベーターコアを配置し、歩道からのアプローチを造成。三つのコアで立体トラスを浮かせ、吊り構造によりハンギングガーデンを形成。交差点側には、可視領域類型の放射型に有効に働くアイストップとして、局所的にデザインの異なる大テラスを設ける。反対側の立面には平行型に有効なカーテンウォールを設ける。全体的に立面に対する視線の抜けを作り、高架の浮遊感を助長させる。



水平性をもったボリュームが首都高に重なり、さらにプロムナードはどこまでも続いていく。一つの帯の上で多様な空間を生みながらも首都高という形態的なアイデンティティを保ち続け、水平のランドマークとして進化していく。



銀座のビル群を眺めながら遊歩道を歩く。



加速斜線付近の直線を利用した陸上トラック。



道路幅員による空闊で公園と遊歩道を形成。



バンク角を利用したすり鉢状のパブリックシアター。



円形の広場に出て太陽の光に照らされる。



銀座のビル群の中に突如現れるガーデン。